

ヘンデル(1685-1759)の「オンブラ・マイ・フ」、ジャコモ・カリッシミ(1605-74)の「勝利だ、私の心よ」、アレッサンドロ・ストラデッラ(1644-82)の「主よ、憐れみたまえ」、トンマーズ・ジョルダーニ(1733-1806)の「いとしい人よ(カロ・ミオ・ベン)」、アレッサンドロ・スカルラッティ(1660-1725)の「陽はすでにガンジス川から」、以上の 5 曲は、声楽を学ぶ者なら誰もが歌う『イタリア古典歌曲集』に収められた名曲である。

ヴィンチェンツォ・ベッリーニ(1801-35)はイタリア・オペラの大家で、そのカンタービレの美しさをショパンが愛したことで知られる。「優雅な月よ」は学生時代の作で、夜空の月を見て恋人を思う甘美な歌。《夢遊病の女》はロマン的喜劇。久々にスイスの村に帰った領主ロドルフォ伯爵は、アリア「ああ、再び見る、懐かしい眺め」を歌う。

ベッリーニと同時代のイタリア・オペラのもう一人の大家がガエターノ・ドニゼッティ(1797-1848)。《愛の妙薬》はロマン的喜劇の代表作。「人知れぬ涙」は第 2 幕でネモリーノが美しい娘アディーナを思って歌う名アリア。「これがその魔法の液体じゃよ〜ゆきなされ、たいへん幸せなひとよ」は、第 1 幕で「愛の妙薬」と偽ってワインを売ろうとするドゥルカマーラがネモリーノと歌う愉快な二重唱。

モーツァルト(1756-91)が、ダ・ポンテの台本を得て作曲した《コジ・ファン・トゥッテ》《ドン・ジョヴァンニ》は不滅の名作。《コジ・ファン・トゥッテ》は、男たちが女性の貞操を試そうと企むオペラ・ブッフア。変装したグリエルモとフェランドは姉妹を口説き落とそうと、二重唱「遂げさせたまえ、やさしいそよ風よ」を歌う。一方の《ドン・ジョヴァンニ》は、物語にも音楽にも迫真性が漲る。主人を追うドンナ・エルヴィーラを諦めさせるため、従者レポレッロはドン・ジョヴァンニがどれほど女性を泣かせてきたかと、愉快半分に「カタログの歌」を歌う。

モーツァルトはコンサート用アリアをいくつか書いているが、「どうか詮索しないで下さい」は、アンフォッシ作曲のオペラで伯爵役を歌う名歌手アダムベルガーのために書いたロンド。伯爵が苦悩し、怒りを燃やすさまを劇的に描いている。

1859 年初演の《仮面舞踏会》は、イタリア・オペラの巨人ヴェルディ(1813-1901)の名作。物語はスウェーデン国王の暗殺事件をもとにしているが、改訂版で舞台がボストンに変更された。秘書レナートの妻となったアメーリアとの愛に苦しむリッカルドは、これ以上彼らの幸福を妨げまいという葛藤を抱きながら悲痛なアリア「永久に君を失えば」を歌う。《仮面舞踏会》の前作にあたる《シモン・ボッカネグラ》は 1857 年初演(24 年後の 1881 年に改訂)。この大河ドラマ的オペラのプロローグでジェノヴァの貴族フィエスコが歌うのが「引き裂かれた父の心は」。海賊であったシモンと恋仲になったマリアを幽閉して死に至らせた悲しみと、シモンへの怒りを語るモノローグである。

多くの作曲家がゲーテ『ファウスト』の音楽化を試みたが、シャルル・グノー(1818-93)がフランス的な味付けを施した《ファウスト》はその代表格。「この清らかな住まい」は「汚れのないマルガレーテの家には幸福が溢れる」と、ファウストが歌うカヴァティーナ。若さと引きかえに、ファウストに魂を売らせた悪魔メフィストフェレスは、眠るマルガレーテの家の窓辺で上機嫌なセレナード「眠ったふりをせずに」を歌う。第 1 幕においてファウストが魂を売り、若者の姿に変わる時に歌われる二重唱「だが神よ」は、本作屈指のナンバー。